の構成を批判して所謂佐藤家學の傳統を否認しそは要するに信淵の觀念的製作に過ぎずといひ又彼が自ら稱してその獨創に出づるといふ思想と理論も多くは他にその所據を求め得べくこの見地よりすれば彼は畢竟單なる編纂者にすぎずと評すべきもこの編纂はその本質に於て偉大なる綜合を意味しかくして成立せる經濟學體系は彼獨特の組織なりとした。而して彼の思想開展の地盤となれる體驗は同時代に於いて飢饉及び生兒陰殺に顯れた國民經濟的不安がそれであり、その救濟に對する要求が遂に彼をして最後に國家資本主義的理論を歸結せしむるに至つたとするのである。著者はさきに「轉形期の歴史學」を著して唯物史觀を提唱し「現代歴史哲學の基礎」を與へたと稱する少壯新進の學徒であり本書は正にかの理論に對する實證的方面を示すものであらうか。一讀してその態度の鮮明を感ずるが人物又は思想をその時代と環境との中に見る方法は我々が過去に於てもなほこれを見たところではなからうか。只我々が感謝するは近來經濟學の立場より歴史を見る者が往々にしてあまりに概念的な歴史の理解を試みるに對し著者が愼重なる歴史家の態度に於て問題を取扱はれた點である。さればその歴史的理解は概ね妥當ではあるが、聊か冗長である。（菊判二〇九頁、價二・〇〇、東京岩波書店發行）（肥後）

●談山神社文書　談山神社刊書奉賛會

多武峯の草創は事新しく說く迄もなく、祭神大織冠鎌足公の長子定慧和尙の建立せる妙樂寺、後年大織冠の靈像を安置せる聖靈院にある。爾來藤原氏の繁榮と共に寺勢興隆し、廣大なる寺領、多數の神人はその靈像の希異と相俟つて、南都北嶺につぎ廷臣の一大威嚇となつた。其勢力の溢るゝ所幾度か兵火の厄に遭ひながら夥しき刀槍と共に尙二千五百通の文書を藏有してゐる。

彼の由緒と勢力とを有せる談山神社の文書が政治に、經濟に或は朝廷武家の交涉に深き關係を持つ事は想像に難くない。

前宮司吉井良地氏は本神社に奉仕してより什寶を整理し、如此資料を空しく祕藏するを惜しみ、嚮に春日神社文書を編修刊行して學界に大なる貢獻せられたる本學中

村助教授に囑し、茲に本書の上梓を見るに至つたのである。

春日神社文書と略同樣の形式において本文七九六頁より成る「談山神社文書」の學術的價値の偉大なるは今更多言を要すまい。研究者の踏む大なる徒勞を省く此の事業の如何に困難であるかは、史料編纂掛のそれと思併せて大なる感謝を編者並びに刊行者に捧げなければならぬ。

內容は圖版二四、文書五三一を收載する。圖版目次の一部を示さば、神影、御破裂御平癒勅使參向圖、並びに祈願告文等は圖版と共に談山神社御破裂の國家的意義を理念し、あるものは郡山御遷座の軍事的意義を、或は織豐德三氏の對社寺を窺ひ得られよう。又は後陽成天皇御宸筆後法興院政家記抄、神道長上日時勘文、狩野探幽自筆書狀、寶生太夫勝吉書狀、鵜殿關錢納日記、以下の比類稀なる史料を容易に利用し得られる。

而して卷末附錄に作製收錄せられたる人名、社寺名、地名、件名の諸索引は如何に學徒に多大の便を與へるであらう所藏文書總目錄と共にその周到なる用意は蓋し推賞の辭を惜まないものである。

如此資料集の刊行が各大社、大寺、諸藩等に於て行はれるならば日本研究に如何に役立ち容易になるであらうか、吾人は今この書を手にしつゝその理想の實現の一日も早からん事を祈つてやまない。（菊版 附錄八一頁、價八圓、星野書店）〔寺尾〕

●日蓮聖人研究 第一卷　山川智應著

本書は日蓮聖人の信者であり研究者である著者が聖人に就いて研究した過去の業績を纏めて世に出だされたもので、明治四十二年より最近に至るまでの論說十三篇を含み、其の大部分は既に諸種の雜誌に揭載されたものである。その主たる內容は第一部史的研究、第一門史的考證、日蓮聖人の發心立願の時期を論ず、淸澄寺宗旨の變遷と其の寺格位地を考ふ、叡山における日蓮聖人の師友の研究、平左衞門尉賴綱の父祖と其の位地權力及び信仰、第二門史的考察、「親鸞日蓮兩上人の對照」の批判、第二部文獻的研究、第一門眞蹟研究、「日蓮聖人御眞蹟」と其の「對照錄」、第二門遺文研究、「三大祕法抄」の眞僞問題、第